兒童心理學（第四講）

牛島義友

男兒と女兒

子供特に幼兒は中性の時代であつて、男兒と女兒と區別して保育したり、區別して眺める必要がないとの考があるが、之は皮層的な考へ方である。

精神分析學のフロイドが小兒期の性意識を重要な問題として取上げたのは一應正しい態度である。但し私はフロイドの考を其儘肯定しようとするものではない。併し兎に角幼兒期にも明瞭な男女の差があり、其點を考慮に入れて保育して行く必要があると思ふ。

男兒と女兒とは其發育狀態にも多少の差異があらう。體力には既に相當の違ひがあり、精神の方面にも差がある。併し智能の發達とか言語の發達等の知的方面では著しい差はない。女兒は言葉の發達が進んで居ると言はれるが、實際の檢査の結果は必しも女の方が優れて居るとは言へない。吾々が幼兒の語彙の理解力を檢査した結果を示すと次の如くなる。之は總人數九八七名について檢査したものであり、偏差値で現してある。

此結果では滿二、三歲まで女兒の方が少し優れてをるが、五、六歲兒では男兒の方が成績良く、全體としては男の方がよくなつて居る。併し此差は僅小であるから、男或は女が優つて居るとか劣るとか結論するよりも、大した差がないと結論する方が妥當である。

	男	女
滿二歲兒	49.00	52.00
三歲兒	54.80	55.05
四歲兒	50.90	50.76
五歲兒	50.56	48.27
六歲兒	50.69	48.00
合計	51.28	49.91

同樣に智能檢査の場合でも大した差はない。吾々が乳幼兒精神發達檢査を一、二五一名の乳幼兒に課した結果を示すと次の如くなる。此數字も偏差値で現してある。

	男	女
滿一歲未滿兒	51.54	51.05
一歲兒	50.75	51.48
二、四歲兒	50.96	51.42
五、六歲兒	52.08	51.49
合計	51.48	51.33

即ち年齡によつて男女の優劣が變り、全體としては殆んど差が無くなつて居る。故に知的方面には男女兒で差は無く從つて知的教育で手加減をする必要は全くない。問題は主として性格の方面にある。故に玆では性格に就いて、特に其中でも女兒が自分が女である事を如何に思つて居るかを詳述しやうと思ふ。

子供達は自分が男であり、女であるとの意識を早くから持つて居るが、それは男は强い者、女は弱い者と言ふ形で持つて居る。アドラーは凡ての人間の究極の意慾は權力を持ちたいとの慾望であると述べて居るが、子供も他の子供より優り度いとの慾望を持つて居る。子供の生活で强い者とは專ら身體的優者である。處が女兒は男兒に較べて體力や運動性に於て劣つて居る爲に、男兒は强い者として優越を感じ、女兒は弱い者として劣等感を感じて居る。即ち幼兒の性意識とは男は强いもの女は弱い者と言ふ力の原理に依つて構成されて居る、此男女兒の强弱感が起る原因は上述の身體的能力の外に教育や躾も關係がある。二三歲兒になると與へる玩具も男は自動車、女は人形と言ふ風に相違するし、着物の色や形も異る。又女の子には常に「女の子はもつとおとなしくしなければいけない。お行儀よくしなければいけない」と教へ、男の子からいぢめられても、そんな亂暴な男の子と遊ぶから惡いのですよと、却つていぢめられる女の方が叱られたりする。斯る事から女兒は男兒に對して劣等感や、くやしさを感ずるようになる。斯くして幼時期に於ては女である事は弱者を意味し、玆に女性的性格の最初の礎石が置かれる。

具體的な例をあげて說明しよう。之は幼兒期の憶ひ出の記錄から拾つたものである。

「その日の夕方母にその男の子と階段から飛び下りて遊んだ事等を話したら、母に女の子はそんな男の子のする樣な荒いまねをしてはいけないと言はれた。けれどもとても階段を飛降りる事に興味を持つて了つて、家の階段から飛降りて居た時、母に見つけられて叱られた。母は男の子ならやつてもよいと言つたので男の子が羨ましくて仕方がなかつた」。(K・S)

男兒の樣に階段から飛降りられなくても左程大した事ではないが、次の例の樣になると問題が少し大きくなる。幼稚園にやる事は子供の社會性を養ふ爲によい事だと言はれる。然るにこの子供は幼稚園に行つた爲に散々いぢめられ、いぢけた子供になり、却つて社會性を弱めて居る。

「子供の最も樂しき場所となるべき幼稚園を悲しみの爲に去らせた最大の原因は何と言つても弱蟲だと言つていぢめられる事であつた。ブランコだつて弱蟲だからと言ふ理由の爲に中々待つてものせてもらへない。滑り臺だつて一番後廻しだ、砂あそびの仲間入りもさせてもらへない。いつも自分が遊ぶ時よりも皆の面白さうに遊んでゐるのを眺めてゐる時の方が多かつた。でもまだこれ位ならいゝ方だつた。時には腕力を誇つてゐる腕白もの達に取圍まれ一人ぼつちで抵抗出來ないのをこれ幸と散々いぢめられ結局は私が泣き出し先生の御訓戒で事が解決するのが常でした。けれども當時この樣なひどい壓迫を受けて『今度こそはあの頭を下駄で一々打つてやらう』『今度こそ我慢ならぬ、先生に言ひつけて穴ぐらの中にあの子たちを入れてやるんだ』等といふ反抗的な氣持がムラ〳〵と起つて來るが、何分向ふは大勢の男子であるのに反し、こちらは一人なので抵抗は出來なかつた。その中いつしかひねくれて來て、男の子に泣かされてもくやしさや反抗心よりも悲しさ情なさの方が先に立ちすぐ泣き出す樣になつた。」(M・T)

たゞ幼稚園に子供をやればよい譯ではない。子供達だけの世界は決して教育的でもなければ、溫く柔かい母の懷とも異り、意地惡と、からかひに滿ちた小さな戰場である。幼稚園の生活に細心の注意を拂つてやらねば却つて害になる事もある。も一つ同じ樣な例。

「毎日幼稚園に出かけるのは地獄へ行くようだつた。それは私がいぢめられる子だつたからだ。私は幼稚園の子供達の生活は大人が見る樣に、決して單純な無邪氣な樂園ではないと言ひ度い。送つて來てくれた女中が玄關の所で歸つてしまひ、私が一人で階段を登つて中へ入つて行く時は、厭な氣がした。一室に五つ六つの机があつて、一つの机に四五人宛組になつて子供が坐る。私の机の女の子と男の子は机を圍んでの細工物の時間には私をのけて、彼等だけでしやべり、凡ゆる事を私の惡口を言ふ材料とし、遊戯の時は私を無視した。其中の頭目がAと言ふ男の子で、彼は吾々の上に君臨し私をいぢめる張本人であつた。

或日食事の時になつたので、生徒は辨當を溫める棚に殺倒した。私はその群の中で急に頰に熱い痛みを感じた。それが今自分の前をすぎた男の子の坊主頭がぎうと頰をこすつたのだと知つた時、男の毛の短い頭つてこんなに硬い痛いものかと發見した驚きで暫くその事を考へて立つて居た。それが男といふものを區別して考へた初めであつた。」(YY)

男兒のいが栗頭で小惡魔としての男性を意識し始めたのも面白いが、此小惡魔への恐怖は其後の生活に長くつきまつて來るから厄介である。

併し凡ての女兒が男兒にいぢめつけられて居る譯ではない。中には男兒の方をやつゝける女丈夫もある。次の例は女兒としては例外的なものと思ふが極めて面白い武勇傳であるから引用してみよう。

「幼い頃、よく家に遊びに來る同年の男の子とある日砂場で山をつくつて遊んでゐた。その中に彼が苦心してつくつたトンネルか何かを私の指がすべつてうつかり崩してしまつた。その男の子はしばらく私を睨んでゐたがふいに立つて、『おい、女のくせに。あやまれ』と云つた。私は家庭でそんな荒い言葉で物を言はれた事がなかつたし、自分がうつかりした事にも氣づいてゐなかつたのでぼんやりしてゐると、又おひかけて『女のくせに』と云はれ、あまつさへ、向ふこそ『女のやうに』人の頰をひつかいたのである。よほど爪をはやしてゐたものとみえて、私の傷は學校に入つてからも長い間のこつてゐたほど深くつき、血がリボンのやうにしたゝつた。私は痛みも痛し、口惜しくもあり、その場でやり返さうかと思つたがふとうんと計畫的に復讐してやれといふよい考が浮んだのでその場はだまつて仲直りをして濟ました。夜になつて考へると、思ひ出されるのは『女のくせに』といふ言葉である。しかしつら〳〵おもんみるに、その『女を馬鹿にしてゐる』男の子は遊びの時、一度だつて自ら素晴しい計畫を考へた事もなければ、女の私をあつといはせるほどの樂しい事も見つけ出しはしなかつたでないか。女の私が六つで、ひらがなもABCさへも讀めたのに反して、(私は早熟であつた)彼は片假名さへやつとではないか。高い枝から梅の實を取るのに、いつも方法を考へ出すのは女の私ではなかつたか。かう考へて來ると、私は斷然彼を輕蔑する氣になつた。取るにも足りないけちな了見、狹い度量。しかしこらしめておく必要はある。二度と『女』を見下げないやうに。私は翌朝、いつものやうに彼をよびよせておいて、青竹でいやといふ程ひつぱたいた。ひろいダリヤの畑中おひかけまはして。午後、それに氣づいておごろいた母が、その子の家に詫びに行つた時、相手の兩親にすまなくて二度とそのこぶを見られなかつたといふ程ひどくたゝきのめした。それ以後、遊びの時も、本を見る時も、彼はいつも女の私の家來といふ肩書を帶びてゐた。

(I・M)

この女の人は自分は强情で今まで男性に拮抗感や劣等感を懷いた事はなく、却つて常に優越感を感じて居たと言つてゐるが、斯る場合には弱き者よ汝の名は女なりとの言葉は當嵌らず、たのもしい限りである。

幼稚園は併し常に小惡魔の巢窟と言ふ譯ではなく、素晴しい王子樣やお姫樣も居る。男の仲間に入つて樂しく遊んで居る女兒も居る。

「幼稚園時代私の心の中にも當然『男の子』が意識された。強ひていへば對立意識とでも言ふのであらうが、私の場合には、それは『强者に對する一種の憧憬』ともいふべき形をとつたのである。卽ち男の子は女の子より遙かに强いものであると認め、男の子に何かしら羨しい樣な、讃美する樣な氣持を抱いた。同時に自分と同性である女の子達を弱いもの、つまらぬものと輕視する樣になつた。その頃既にお轉婆娘、女の子らしくない女の子として定評をうけてゐた私は自分でもそれを認めて、自分は女の子よりもむしろ男の子に近いものであると考へ、しかもそれに滿足してゐたのである。その結果女の子と遊ぶ樣な事は少く、好んで男の子の仲間入りをして戰爭ごつこなどした。男の子たちも私だけは例外として一緒に遊んでくれ、對等につきあつてくれた。これは私にとつて非常な誇りであり、他の子に對して優越感を感ぜしめた。（K）

男兒の仲間入りするのはよいが、それによつて女の仲間をつまらぬものとして輕視したのでは困る。こゝに既に劣等感が潛んで居り自分だけが女の仲間から離脫する事によつて滿足しようとして居る。

次の例はアドラー的よりもフロイド的な例の樣ではあるが、この小さなアダムとエバの間に親和的態度の萠芽が見られる。

「末子である關係から隨分早くから幼稚園にやられた。その爲に卒業近くの頃は相當な古株で幅をきかして居た。その幼稚園では上級の組の男の子から一人、女の子から一人選んでお父さんお母さんと呼び、丁度小學校の級長の樣なものがあつた。私が『お母さん』に選ばれ、Kと言ふ子が『お父さん』だつた。その關係から私はKと大仲良しで、家が大分離れて居たにも拘らずよく遊びに行つたし、彼もやつて來た。幼稚園では大抵彼と行動を共にし、彼がよその子と話して居るのを見て怒つて泣いた記憶がある。子供乍ら彼を獨占したい氣持にかられたことがあつたと思ふ。Kをその頃幼稚園で一番强く綺麗な子だと思つて大好きで、彼もブランコに乘る時等私をかばふ樣な態度をした。（I・N）

斯の樣に學齡前の幼兒と言へども性的に無關心ではなく、拮抗と親和の兩型を見る事が出來る。併し此頃の劣等感の根據は淺いから家庭の教育等が適當である場合には女兒は自分が女である事を全く意識せずに過してしまふ事もある。